

大学教育におけるスポーツ・マネジメントに関する研究

著者名(日)	金子 勝一, 齊藤 実
雑誌名	山梨学院大学経営情報学論集
巻	17
ページ	9-15
発行年	2011-02-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000308/

大学教育におけるスポーツ・マネジメントに関する研究

金子 勝一・齊藤 実

1. はじめに

近年、大学教育において、スポーツ・マネジメントに対する関心が高まっている。このような背景には、ロサンゼルス・オリンピック以降のアマチュア・スポーツの商業化、プロ・スポーツの巨大産業化などが要因にあるのではないと思われる。とりわけ、オリンピックの商業化の影響は大きく、アマチュア・スポーツにおける商業化は巨額の資金を要する大イベントに変化させるとともにスポーツ・ビジネスを成功に導いており、こうした成功がこれまで以上にスポーツ分野における「マネジメント」の重要性を認識させることになっているのである。近年のこのようなスポーツ界の流れの中で、大学をはじめとする高等教育機関においても、スポーツ競技（カレッジ・スポーツ）やスポーツ健康科学・スポーツ科学に加えて、スポーツ・マネジメントに対する必要性が高まりつつあり、多くの大学がこれらの要請に応えるべく、関連する学部・学科およびコース等を開設している。

一方、山梨学院大学では、これまでスポーツに関連する専門の学部・学科・コースは設置されていないが、大学スポーツ界において、陸上（駅伝）・ホッケー・水泳・柔道・レスリング・ラグビー等、幅広いスポーツ競技の舞台で活躍する人材を多数輩出している。このように、本学の教育の特徴の一つが他大学のようなスポーツ関連分野の学部・学科を持たずに、カレッジ・スポーツの分野で活躍する人材育成を可能にしているということである。しかしながら、スポ

ーツに携わっている全ての学生が必ずしもトップ・アスリートをめざしているわけではなく、スポーツに関わるコーチング、チーム・マネジメント、ボランティア等、学生のめざすべき目標はさまざまであるようである。さらに、こうした大学での勉学の場合、そして就職先やライフワークとしていかにしてスポーツとの関わりを持つことができるかを模索している学生も少なくないのが実情である。

そこで、本学経営情報学部でも、2008年度からスポーツ・マネジメントに関連する科目を開設し、このスポーツ・マネジメントを履修するためのモデル（コースではなく、あくまでも履修モデルであり、スポーツ・マネジメントに関連する科目を履修するための選択肢は緩やかである）を設置している。

一方で、こうしたスポーツ・マネジメントとはどのような学問なのであろうかといった疑問も残る。なぜなら、スポーツ・マネジメントは歴史の浅い研究領域〔1〕であり、とりわけ日本においては欧米と比較してさらに新しい学問領域として位置づけられるからである。その上、スポーツ・マネジメントに関係する大学教員や学生においても、それぞれの大学の置かれた立場によって、その認識は異なっているように思われる。

本研究では、マネジメントとは何かといった問題に焦点を当て、大学教育におけるスポーツ・マネジメントを検討するものである。そして、スポーツ・マネジメントとはどのような学問体系であるのかを理解するための枠組みを提案する。これにより、大学教育におけるスポーツ・

マネジメントの位置づけを少しでも明確化することができるのではないかと考えている。

2. マネジメントとは何か

現代社会において、大変なじみ深い用語の一つが「マネジメント」であろう。このマネジメントという用語は企業のみならず官庁や大学等、幅広い分野で用いられている。こうしたマネジメントという用語に対して、この意味を簡潔に答えることはとても容易なように思えるが、現実には困難であることが少なくない。

一般に、マネジメント（management）は、日本語で「管理」や「経営」とされており、日本語においては一意に決定づけられることができず、既に多義的に捉えられているのである。こうしたことから、マネジメントというような英語としての用語を用いる場合と日本語のそれはニュアンスが異なることもある。すなわち、マネジメントという用語を用いる立場の相違により、理解している意味が異なっていることも少なくないのである。

さらに、ドラッカー [3] によれば、「マネジメントという言葉は、奇妙なほど難しい言葉である」と指摘された上で、さらに、「この言葉は第一に、アメリカ語に特有なもので、他の言語にはイギリス語にもほとんど翻訳できない」とされていた時期もあったようである。

一方、山下 [2] は、このマネジメントを広義の管理として、またコントロールを狭義の管理として位置づけ、これと支援（サポート）との関係について、図1のような枠組みを提示している。マネジメントという意味での管理が、コントロールという意味での管理（統制）と支援（サポート）によって構成され则认为るのである。

これまで見たように、マネジメントという用語は多義的な意味を有していることがわかる。これに対して、スポーツ・マネジメントのよう

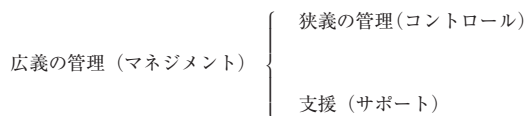


図1 管理と支援 [2]

に、マネジメントという用語と他の単語が結合した複合語の用語からなる研究分野も少なくないのであるが、それぞれの研究分野においてもマネジメントに対する共通認識がなされていないのではないかと疑問が残る。そこで次節では、スポーツ・マネジメントについて、各大学におけるスポーツ・マネジメントのカリキュラム構成例、日本スポーツマネジメント学会の研究・実践分野を概観し、これによりスポーツ・マネジメントにおけるマネジメントをそれぞれの分野においてどのように捉えているのかを検討していくことにする。

3. スポーツ・マネジメント

3. 1 大学におけるスポーツ・マネジメントの事例

近年、スポーツ・マネジメントに関連する学部・学科・コースおよび学習（履修）モデルを開設している大学が著しく増加している。

こうした流れは、これまでの伝統的な体育系大学や医療や健康系の大学とは異なり、大学の実情による要請であるようである。そこで以下では、本学の経営情報学部とスポーツ・マネジメント関連をコースや学科として設置している3つの大学のカリキュラム構成を概観し、大学教育におけるスポーツ・マネジメントの捉え方を概観していくことにする。さらに、スポーツ・マネジメントを研究領域としている学会の活動概要を概観し、大学教育におけるスポーツ・マネジメントの捉え方との差異を検討していく。

（1）本学の主なカリキュラム構成

経営情報学部専門科目には、大きく経営系と情報系の2系列に分類されており、そのため次のような講座がそれぞれの系列で開講されている。

〈経営系〉

- ① スポーツ・マネジメント論
- ② イベント・マネジメント
- ③ スポーツ産業論
- ④ スポーツと地域貢献
- ⑤ スポーツ・リーター論
- ⑥ チーム・マネジメント

など

〈情報系〉

- ① スポーツ・コミュニケーション論
- ② スポーツ・メディア論
- ③ スポーツ・データ論
- ④ 身体情報処理論

など

なお、これら専門科目の他に、総合基礎教育科目に、スポーツ経営学、スポーツ科学、スポーツ社会学、スポーツ医学、スポーツ心理学といった基礎的かつ広範な領域の科目が開講されている。

こうした講義科目からわかるように、経営情報学部の中にスポーツ・マネジメントの履修科目を置くということで、情報科学・情報工学のような工学一般や医学・健康に関連した講義科目も設置されている。

一方で、経営情報学部のカリキュラムが経営系と情報系に大別されており、こうしたカリキュラム体系に起因してスポーツ系の科目がこれら2つの系列に分類されているが、仮に他の学部であれば異なる系列に分類されることになるのではないと思われる。

なお、スポーツ関連で取得可能な主な資格は日本体育協会公認スポーツ指導者資格「スポーツリーダー」（スポーツ指導基礎資格）、日本サッカー協会公認「C級コーチライセンス」など

があり、さらに経営情報学部に関連した情報処理技術者試験をはじめとした多くの資格取得も可能である。これらの資格に加えて、経営情報学部であるので高等学校教諭1種免許状は「情報」を取得することができる。

(2) スポーツ・マネジメント関連をコースとして開設している大学のカリキュラム構成例

次に、経営系の学部・学科にコース制を導入しているカリキュラム構成の例を鳥瞰しよう。経営系にスポーツ・マネジメント・コースを開設している大学のカリキュラム構成の例は以下の通りである。

- ① スポーツ指導者論
- ② スポーツ・ビジネス論
- ③ 野球ビジネス論
- ④ サッカービジネス論
- ⑤ 競技スポーツ論（野球）
- ⑥ 競技スポーツ論（サッカー）
- ⑦ コーチング論
- ⑧ トレーニング論
- ⑨ トレーニング実習
- ⑩ コーチング実習（野球）
- ⑪ コーチング実習（サッカー）

など

なお、経営系の学部・学科（経営学部や経済学部等）において、こうしたスポーツ・マネジメント・コースを開設している大学は少なくないのが実情である。さらに、それらの多くの大学が既存学部・既存学科内に追加的にスポーツ・マネジメント・コースを導入しているようである。

(3) スポーツ・マネジメント関連を学科として開設している大学のカリキュラム構成例

スポーツ・マネジメント、スポーツ経営学またはスポーツ・ビジネスを学科として開設している大学は、前述のようなコースとして開設し

ている大学と比較するとそれほど多くないようである。ここでは、経営情報学部（本学と同一の学部である）内の一つの学科としてスポーツ・ビジネス（マネジメントではない）学科が開設されている大学のカリキュラム構成の例を示すことにする。

- ① スポーツ運動学
- ② スポーツ指導論
- ③ コンディショニング論
- ④ スポーツ産業論
- ⑤ 地域とスポーツ
- ⑥ スポーツ・イベント企画
- ⑦ スポーツ統計学
- ⑧ スポーツ情報処理
- ⑨ スポーツ医学
- ⑩ 生涯スポーツ
など

この大学では、スポーツ・ビジネス学科の下に、さらに3つのコース（スポーツ指導者、スポーツ経営、健康プランニング）が設けられている。このような経営情報学部の下に学科・コースを設けているカリキュラム構成では、これらの科目に加えて経営情報学部に関連する経営系と情報系の基礎科目を設置することになり、本学と同様なカリキュラム体系であるともいえる。

なお、高校教育免許は本学と同様に「情報」を取得することができる。

以上のように大学におけるスポーツ・マネジメント関連分野では、その設置の在り方やカリキュラム構成は多様であることがわかる。

（4）スポーツ・マネジメント関連学会

スポーツ・マネジメントの研究領域では、スポーツ・マネジメントをどのように捉えているのであろうか。そこで、この名称を使用している学会である日本スポーツマネジメント学会の研究・実践分野を参考にしよう。

- ① スポーツマーケティング（スポンサーシ

ップ、消費者行動など）

- ② マネジメント・リーダーシップ（組織、GM、ボランティアなど）
- ③ スポーツ政策
- ④ ファイナンス & エコノミクス
- ⑤ ファシリティマネジメント（PFI、指定管理者制度など）
- ⑥ 教育（カリキュラム、人材育成、インターンシップなど）
- ⑦ スポーツツーリズム
- ⑧ スポーツ法学
- ⑨ スポーツ・コミュニケーション（メディア、ジャーナリズム、広報など）
- ⑩ その他

以上の内容から、スポーツ・マネジメントの基盤となる研究・実践領域は経営・社会科学系のマネジメントを中心とした研究・実践分野になっていることが理解できる。大学教育におけるスポーツ・マネジメントには、各大学の学部・学科の特徴により必ずしも同一の枠組みには合わないようであるが、工学・情報科学分野が含まれることが多いようである。すなわち、研究領域におけるスポーツ・マネジメントと学校教育におけるスポーツ・マネジメントとの比較において両者の間には相違が生じており、後者のスポーツ・マネジメントは前者に対して幅広い学習領域をめざしている点に相違があるように思われる。

一方、関連性の希薄な学部や学科の中に学科やコース等を開講する場合にはリスクを伴うことを認識しておく必要がある。なぜなら、このような関連性の希薄な学部内にスポーツ・マネジメントを開設した大学の中には、元の研究分野の学部・コースに学生が集まらず、さらなる悪循環に陥り、その結果として社会科学を中心としたスポーツ・マネジメントの方向を健康や医療を含めた幅広い分野に広げて展開するようにしているところもあるからである。

3. 2 大学におけるスポーツ・マネジメントの課題

3.1項において概観した通り、大学におけるスポーツ・マネジメント系のカリキュラム体系は必ずしも経営系の学問領域に収まらず、情報科学、健康・医療・体育といった多様で学際的なカリキュラム体系を志向しているようである。これは、大学の実情や教育目標の変化によって、必ずしも学会の研究領域とは一致しないことを意味している。このようなスポーツ・マネジメント系の学部・学科等を設置している多くの大学が既存学部新たに学科・コースや履修モデルを設置していることが多く、こうしたスポーツ・マネジメントを学部・学科等として新たに開講する主な要因は大学を取り巻く環境が厳しくなっていることにあり、この対応として学生確保の手段の一つとして開設されてきたのではないと思われる。こうした状況により、大学間でスポーツ・マネジメントに対する捉え方が少なからず異なっているであろう。もちろん、大学の特色を活かしながら、各大学独自でスポーツ・マネジメントの位置づけを明確にすることはとてもよい方法であるように思われる。

一方、スポーツ・マネジメントを学ぶ学生にとっては、大学教育におけるスポーツ・マネジメントに対する正しい理解が必要になるものと考えられる。

4. スポーツ・マネジメントを取り巻く状況

スポーツ・マネジメントが対象とするスポーツ界は、一見大変華やかに思われている。とりわけ、日本において大変な人気を誇るプロ・スポーツ界の一つがプロ野球であり、戦前戦後を通じてこれまで日本のスポーツ業界をリードしてきている。スポーツ新聞の一面やスポーツ・ニュースの最初の紹介は、野球関連の話題が多いことからその人気の高いことがわかる。し

かしながら、近年のプロ野球を取り巻く環境は大きく変化してきており、以前はドル箱であったはずの読売ジャイアンツ戦を中心としたテレビ中継の視聴率が大きく低下し、中継そのものも大きく減少している。さらに、いくつかの日本のプロ野球球団の経営権が移動しており、日本・世界の経済と同様にマネジメントの面においても楽観視してられない状態にある。そして、2010年秋にもTBSによる横浜ベイスターズの身売り問題が浮上し、紙面を騒がせたのである。この問題は、長引く景気の低迷により、親会社のTBSの経営が厳しくなってきたのも一つの要因であるが、横浜ベイスターズの赤字経営体質という問題が球団身売り問題における大きな要因である。

こうした経営の問題、すなわちスポーツ・マネジメントの問題は、最も人気の高いスポーツであるプロ野球のみならず日本における他の多くのプロ・スポーツにおいても同様の問題を抱えているようである。さらに、リーマン・ショックによる世界同時不況に起因した長引く企業の業績悪化に伴い、プロ・スポーツ界と同様にアマチュア・スポーツにおいても企業支援を受けにくくなっていることも周知の事実であろう。しかしながら、経済状況が低迷していることを理由にスポーツ界の経営もうまくいかないという構図を描いては、やはり厳しい状況に追い込まれることが必然の結果になるであろう。すなわち、他の業界における多くの企業が新しい製品やサービスを提供することにより、新たな市場を開拓し顧客に対して満足度を高め、これによって自社も成長していくのであるが、スポーツ界も同様なステップが必要であるように思われる。さらに、スポーツ界は、他の業界では生み出すことのできない新しい発想や多くの独自性の高い魅力を発揮することが可能であり、こうしたことからスポーツ・マネジメントに対する要請は高まっているのであろう。

一方、スポーツ・ジャーナリストによるある新聞の記事に、「ドラフトは本来、選手個人の問題であり、行事である。会見拒否が本人の意思なら自分で理由を説明するのが筋だった。」といった内容が掲載されていた。しかしながら、組織的なスポーツであれば、個人の問題で済むことだけでなく組織マネジメントの観点から意見を言う必要もあるように思われる。この問題に対しては、こう指摘された紙面の内容とは正反対に、その選手の評判はますます高くなっているのである。すなわち、スポーツ・メディアの観点からのみの知観のみでは不十分であり、スポーツ・マネジメントに対する幅広い立場での理解が必要になるのであろう。

そこで、経営の問題を含めた幅広い領域を学習した人材育成が要請されているのである。

5. スポーツ・マネジメントの枠組み

ここまでスポーツ・マネジメントについて、大学教育のカリキュラム内容を中心に、学会や産業界の現状を概観してきた。これまで概観してきたスポーツ関連の概要をふまえると、こうしたスポーツ・マネジメントにおける「マネジメント」は、「管理」や「経営」という意味を含めて非常に多義的な捉え方がなされているように思われる。このような要因により、スポーツ・マネジメントが多様であり、かつ多義的に理解されているのであろう。

そこで本研究では、大学教育におけるスポーツ・マネジメントを図2のような枠組みで捉えることにする。図2の枠組みでは、スポーツ・マネジメントが、スポーツにおける経営分野のマネジメント、スポーツにおける健康・体育分野におけるマネジメント、工学・情報科学分野の研究領域の3つの分野・領域から構成されていることを表している。

この枠組みでは、スポーツ・マネジメントの中核が経営分野におけるマネジメントにあると

するが、マネジメントには健康・体育分野においても存在することを表すものである。とりわけ、健康・体育分野におけるマネジメントでは、競技者としてのリーダーシップのように、経営分野に属する領域も存在するが、個人の身体能力、メンタル面のようなマネジメントも含まれるのである。さらに、両分野が相互に連携した学問領域を表している。その上で、これらの両分野を支える分野に工学・情報科学の研究領域が存在していることを表している。

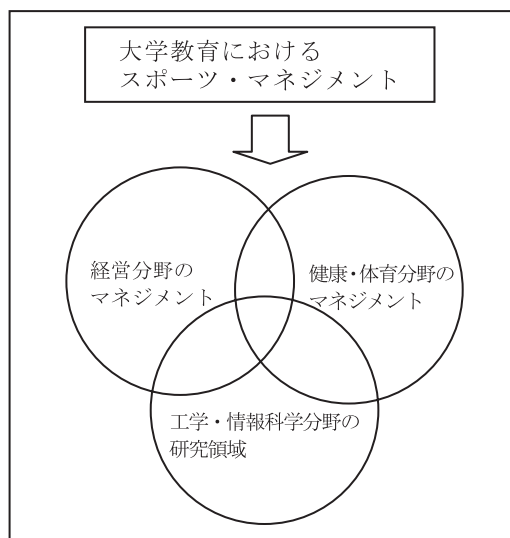


図2 大学教育におけるスポーツ・マネジメントの枠組み

6. おわりに

図2のように、スポーツ・マネジメントとは、経営におけるマネジメントを基盤としている一方で、健康・体育分野におけるスポーツ・マネジメントも関係していることがわかる。すなわち、大学におけるスポーツ・マネジメント教育は経営の枠を越えた広範な学問領域をカバーしており、学生に対して幅広い学習を要請しているのである。

本研究では、大学や企業において広く用いられている用語であるマネジメントに注目して、この用語との複合語であるスポーツ・マネジメントを大学教育の側面から検討した。マネジメントという用語が多義的な意味を有しているのみならず、大学教育におけるスポーツ・マネジメントが新たな教育分野であり、大学教育現場においてもスポーツ・マネジメントとは何かを明確にすることが難しいことを指摘した。その上で、大学教育におけるスポーツ・マネジメントの新たな枠組みを提示し、大学教育におけるのスポーツ・マネジメント教育における共通認識の必要性を示唆した。

〈参考文献〉

- [1] 原田宗彦、小笠原悦子：スポーツマネジメント、大修館書店（2008）
- [2] 山下洋史編著：日本人の心理・行動モデルと日本企業のクォリティ、白桃書房（2010）
- [3] P. F. ドラッカー著、風間禎三郎、野田一夫、村上恒夫訳：マネジメント〈上〉－課題・責任・実践、ダイヤモンド社（1974）

